

うんとうあん  
雲洞庵

越後一の名刹で樹齢300年の杉林に覆われ境内は昼なお暗い雲洞庵は、曹洞宗の禅寺でございます。

今から約1300年前、藤原房前の尼さんでございました母君がこの地に庵を結んだのが始まりとされ、母君亡き後、薬師如来をたずさえてこの地を訪れた藤原房前は、母の菩提を弔ため、薬師如来をご本尊とする雲洞庵を建立したのが始まりといわれております。奈良時代から平安時代にかけて約600年間にわたり尼さんのお寺尼僧院として栄え、現代に至るまで女人成仏のお寺として、女の人の参拝信仰が盛んに行われ、日本一の尼寺と言われております。

(尼僧=出家して仏門に入った女性。尼僧院=女のお坊さんのためのお寺)

しかし、武士の時代となり藤原氏の援助も途絶えると急激にさびれていったのでございます。

その後、室町時代に関東管領の上杉憲実が10万石を寄進し、曹洞宗の禅寺とし再興以来、上杉家の菩提寺とされました。(関東管領=南北朝時代に室町幕府が設置した役職名のこと)



この頃から、雲洞庵には赤い門があり現在でも「赤門」と呼ばれておりますが、これは10万石の格式を示すもので、寺格が高かったことを示す大変貴重なものでございます。

このお寺では、「雲洞庵の土踏んだか」という言葉が有名です。木立に覆われている境内の「赤門」から本堂まで続く参道の敷石の下には、お経を一字ずつ刻んだ石が埋められておりまして、その上を踏んで歩くだけで仏さまの教えが身に付くと言われております。

余談 東大の赤門

文政10年(1827)加賀藩13代藩主前田斉泰は、徳川11代将軍の娘溶姫を正室に迎えるにあたり、(三位以上の)大名が将軍家から妻を迎える際の慣例にしたがい、朱塗りの門を創建した。江戸時代、大名家に嫁いだ将軍家の妻が住まいとした御殿の門を修塗りにした。将軍の娘迎える大名に特別に許された赤い色の門。

お寺や学校や城、庭園などの正面に赤門を据えるところがあるが、その由来については、貴族にゆかりがあるとか、その墓所であるとか、皇族に縁あるとか、さまざまな説があり、これといった定説はないが、赤い門を設けるのは格式が高い証拠。



本堂や庫裏などは、今から約300年前の江戸時代中期の宝永4年（1707）に、新潟県出雲崎の優秀な大工・小黒甚内によって再建されたもので、昭和61年に新潟県の文化財の指定を受けております。本堂には、ご本尊の釈迦牟尼仏（お釈迦さま）をはじめ、脇侍、迦葉尊者（右）、阿難尊者、十六羅漢を

安置しております。（十六羅漢＝中国・日本では仏法を護持することを誓った16人の弟子。その第一番弟子がおびんずる様）

戦国時代には、上杉謙信公からも手厚い庇護を受けたと言われております。雲洞庵は、武家の子ども

の学問の場としての役割もございました。（庇護＝かばって守ること）  
上杉景勝と直江兼続は、幼少のころにこの寺で学問を学び、将来 名将となるための基礎を培ったと言われております。

二人の師は、雲洞庵の13代目の住職・通天存達和尚と言われ、景勝の父政景とは兄弟で、雲洞庵10代目住職の北高全祝和尚の推薦により、日本最初の大学「足利学校」で学んだ秀才でございました。

雲洞庵での生活は厳しく、座禅から始まり、起きて半畳寝て一畳という空間で、冬は寒さに耐え、私語は一切厳禁、のちの兼続こと与六はわずか5歳でこの寺に預けられ、戦国の世を生きる強い精神力を学んだと言われております。

大河ドラマ「天地人」では、兼続初陣の時 七尾城の戦いで蟄居（自宅謹慎）の際にも雲洞庵に籠って己を悔い心を改めたと言われております。

宝物殿には、上杉家ゆかりの数々の品が陳列されております。

景勝が雲洞庵に宛てたお手紙（書簡）や景勝が奉納したと伝わる茶釜、上杉謙信公が実際に使用した頭巾などがございます。越後の国主だった景勝から通天存達和尚に送られた新年のお祝いやお見舞いの文章なども展示されております。